

## 広島原爆投下後の爆心地付近における延焼状況の視覚化

川野徳幸

広島大学平和科学研究センター

大瀧慈

広島大学原爆放射線医科学研究所

岡田高旺

広島市健康福祉局原爆対策部調査課

## **Visualized Map of a fire field near epicenter of Hiroshima A-bomb in August 6, 1945**

**Noriyuki KAWANO**

**Institute for Peace Science, Hiroshima University**

**Megu OHTAKI**

**Research Institute for Radiation Biology and Medicine, Hiroshima University**

**Takao OKADA**

**Research Division, Atomic Bomb Survivors Relief Department, Hiroshima City**

## SUMMARY

The aim of this paper is re-construct a fire field near epicenter of Hiroshima A-bomb in 6 August 1945. For this purpose, we used the official records in *Hiroshima Genbaku Sensaishi (Hiroshima A-bomb Damages)* and plotted spot (town)-specific fire status on a map in order to visualize easily. Our visualized map showed that fires in 21 spots started just after dropping A-bomb and the fire spread with the passage of time. Finally, the fire started in most of the spots of the area within a radius of 2 km of the hypocenter by approximately 15:00. The fire in ten spots was not putout during August 6. The area was on the east side of the Hiroshima city.

はじめに

原爆投下から 65 年が経過した。これまでに原爆被爆被害にかかわる研究は精力的に行われてきた<sup>1</sup>。しかしながら、原爆被害の全貌が明らかになったわけではない。現在もなお、多くの課題を抱えたままである。その一つが、原子爆弾被爆未指定地域における放射性降下物（フォールアウト）による被爆問題、いわゆる「黒い雨」の問題である。この問題に対するこれまでの経緯については後述するが、「黒い雨」の降雨地域分布については、未指定地域住民を中心に降雨地域の見直しの要求が度々あり、社会的関心度も低くはない。本稿の目的は、その「黒い雨」の降雨地域特定に必要な条件の一つとされる原爆投下後の延焼状況の再検討である。具体的には、爆心地からほぼ 2 km 以内における広島市内の延焼状況を時系列的に視覚化する。原爆投下後の二次火災にともなる上昇気流や火事嵐は、放射性降下物の分布に影響を及ぼしているからである（広島市健康福祉局原爆被害対策部 2010：3）。本稿で用いる資料は、『広島原爆被災誌（第二巻）』（1971 年）（以下、『原爆戦災誌』と略称）である。本研究は、現在、広島市及び関係の研究者によって行われている「黒い雨」降雨地域の解明に寄与することを通し、原爆被害の一端を明らかにするものである。

本稿の目的は、原爆投下後の広島における延焼状況の視覚化である。この試みは、本稿が初めてのものであるが、松尾・谷（2007）の研究については、本稿に直接関係する研究として若干触れておく。松尾・谷は 1985 年に日本被団協が実施した「原爆被害者調査」中の原爆被爆体験記、いわゆる被爆証言をデータとして用い、広島原爆被爆者が一次避難場所に至るまでの避難実態の再構成を試みた。その結果、広島の川と橋が初期の一次避難場所として極めて重要であったことを明らかにした。松尾・谷論文では、原爆投下後の火災を原爆被爆者の避難を論じる際の特性として位置づけ、『原爆戦災誌』に記載された出火時刻を調べ、それを地図上にプロットした。被爆直後の火災は、被爆者の避難経路選択を大きく左右したと考えたからである。松尾・谷論文は、一時避難場所に至るまでの避難の実態の再構成が目的であり、その主旨は異なるが、火災に注目したという点において特記すべきであろう。

## 原子爆弾被爆未指定地域検討の経緯

本論に入る前に、「黒い雨」降雨分布に関して、従来どのような調査研究が行われ、どのような結果が示されたのか、ここであらためて確認しておきたい。これは、本研究の意義・位置づけの理解にも資するであろう。以下、広島市健康福祉局原爆被害対策部（2010：182）と黒い雨に関する専門家会編（1991：1-2）を引用し、その概略をまとめることとしたい。

（1）広島管区気象台は、原爆投下直後の1945年8月から12月にかけて、住民への聞き取り調査を実施した。その結果は、宇田道隆気象技師らにより、1953年日本学術会議『原子爆弾災害調査報告書』で報告された。それによると、広島原爆による驟雨は、特に局部的に激烈顕著でかつ比較的広範囲で、長径19km、短径11kmの楕円形ないし長卵形の区域に相当激しい1時間ないしそれ以上も継続せる驟雨を示し、少しでも雨の降った区域は長径29km、短径15キロに及ぶ長卵形をなしている（宇田・菅原 1953：105）と報告された。この雨域は後に「宇田雨域」と呼ばれることになる。

（2）1973年広島県・広島市は、「黒い雨降雨地域健状状況調」を実施した。宇田雨域に関係する地域住民を対象に降雨状況、健康状況の調査を行った。その結果、病弱者及び病気の者の頻度が4割いたことを明らかにした<sup>2</sup>。

（3）当時の厚生省は、上記の調査結果を踏まえ、1976年9月に宇田らによる大雨地域を健康診断特例地域に指定した。その結果、当時、その区域にあった者は、被爆者と同様の健康診断が受けられる特例措置が講じられることとなった。一方、この健康診断特例区域から漏れた地域住民からは不満の声があがった。

（4）1976年・1978年、当時の厚生省は、爆心地から半径30km範囲の107地点で土壌中の残留放射能（セシウム137）調査を実施した。その結果、広島原爆

由来と思われる明らかな放射能は認められなかったと報告すると共に、黒い雨降雨地域と他地域との間で有意差は認められなかったと結論づけた<sup>3</sup>。

(5) 1987年5月、元気象研究所の増田義信氏が「黒い雨は、北約40km、東西約25kmで、従来言われていた地域より広い範囲に降った。」と日本気象学会で発表した。その後、同氏は、地域住民への聞き取り調査・アンケート調査を実施し、「黒い雨」降雨地域は北西約45km、東西約36kmにも及び、従来言われていた地域の約4倍に広がっていると指摘した(増田 1989)。これがいわゆる「増田雨域」である。

(6) これを契機に地域住民の関心は高まり、関係諸団体からも被爆地拡大の声が挙がった。こうした意向を踏まえ、広島県・市は1988年8月、「黒い雨に関する専門家会議」を設置した。同専門家会議は、1976年・1978年に実施された残留放射能調査の再検討、気象シミュレーション計算法による放射性降下物の推定、さらには体細胞突然変異・染色体異常による放射線被曝の人体影響について調査検討を行った。その結果、「黒い雨降雨地域における残留放射能の現時点における残存と放射線によると思われる人体影響の存在を認めることはできなかった。」と結論づけた<sup>4</sup>。

(7) 広島市は、2001年から2004年にかけて、市民約1万人を対象に、「黒い雨」を含む原爆体験、心的影響、健康状態などについて、アンケート調査を実施した。その結果、「黒い雨」体験が心身への影響を与えていることを示唆した(広島市原子爆弾被爆実態調査研究会 2004)。

(8) 広島市は、2008年から2010年にかけて、「第二次原子爆弾被爆実態調査研究」と銘打ち、「原爆体験者等健康意識調査」と「放射性降下物の実態解明に関する検討」を実施した。前者では、広島県の協力を得て、約37000人を対象としたアンケート調査と900人への面談調査を実施した。その結果、未指定地域住民の「黒い雨」体験者は、心身健康面が被爆者に匹敵するほど不良である

ことが明らかになった。同時に、「黒い雨」地域は、宇田雨域より広く、場所によっては増田雨域の外縁部に近似する可能性が示唆された（広島市 2010）。後者においては、終戦直後に建てられた古民家床下の土壌調査を行い、健康診断特例区域外において、広島原爆由来と考えられる放射性物質セシウム 137 を初めて検出した。そのデータを基に当時の外部被曝線量の見積等を行っている。また、1991 年の「黒い雨に関する専門家会議」で実施された気象シミュレーションの課題と再検討の可能性についても提言された（広島「黒い雨」放射能研究会 2010）。

（9）2010 年 10 月、広島市は「原爆による放射性降下物の実態検証会議」を設置し、「黒い雨」降雨状況の再検討を行っている<sup>5</sup>。本稿は、この再検討のための一環である。

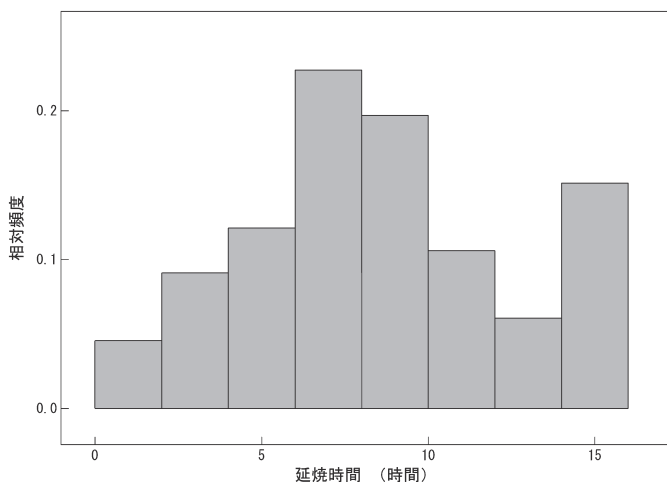
## 資料と分析方法

本稿で用いた資料は『広島原爆戦災誌 第二巻』である。『広島原爆戦災誌』は全五巻からなり、昭和 1971 年（昭和 46 年）に発行されている。第二巻では、広島市全域を 36 地区に分け、被爆直前直後の状況を町別での情報を基本にまとめている。なお、その内容は、広島市が委嘱した地区委員 82 名が調査し、提出した「広島原爆戦災誌資料表（地区用）」を主体とし、被爆者の体験記・証言、その他関係文献に基づいている<sup>6</sup>。本資料は広島市の延焼状況を詳細に検討した唯一の公式記録である。因みに、様々な原爆関連の文献で用いられる爆心地からほぼ 2 km 以内が全壊全焼した地図は『原爆戦災誌』の付録資料である。

分析方法であるが、まずは『原爆戦災誌』に記載されている火災状況・延焼状況に関する情報を表 1 の通りまとめ、巻末に示した。参考までに末尾に『原爆戦災誌』中の該当ページを一部掲載した。表 1 には、地区名、(旧)町名、座標、最初の発火時刻、延焼状況、火災終息時刻などの情報をまとめた。但し、いずれかの情報が欠落するものも少なくない。特に、火災終息時間に関しては、未記載あるいは不明のものが多い。そこで、火災発生時刻と鎮火時刻の双方が判明している 66 町のデータを対象とし、延焼時間の分布について解析を行った。

その結果、延焼時間の分布は中央値が 8 時間 12 分の対数正規分布に近い形状をしていることが分かった。そのヒストグラムを図 1 に示す。なお、本稿では鎮火時刻が不明な町での延焼時間を中央値である 8 時間 12 分とし、それらの町における火災終息時刻を火災発生時刻から 8 時間 12 分後の時点に設定した。また、座標に関しては、2011 年 1 月現在の代表的建物（学校、寺社など）の緯度経度を用いた。

図 1 延焼時間に関するヒストグラム

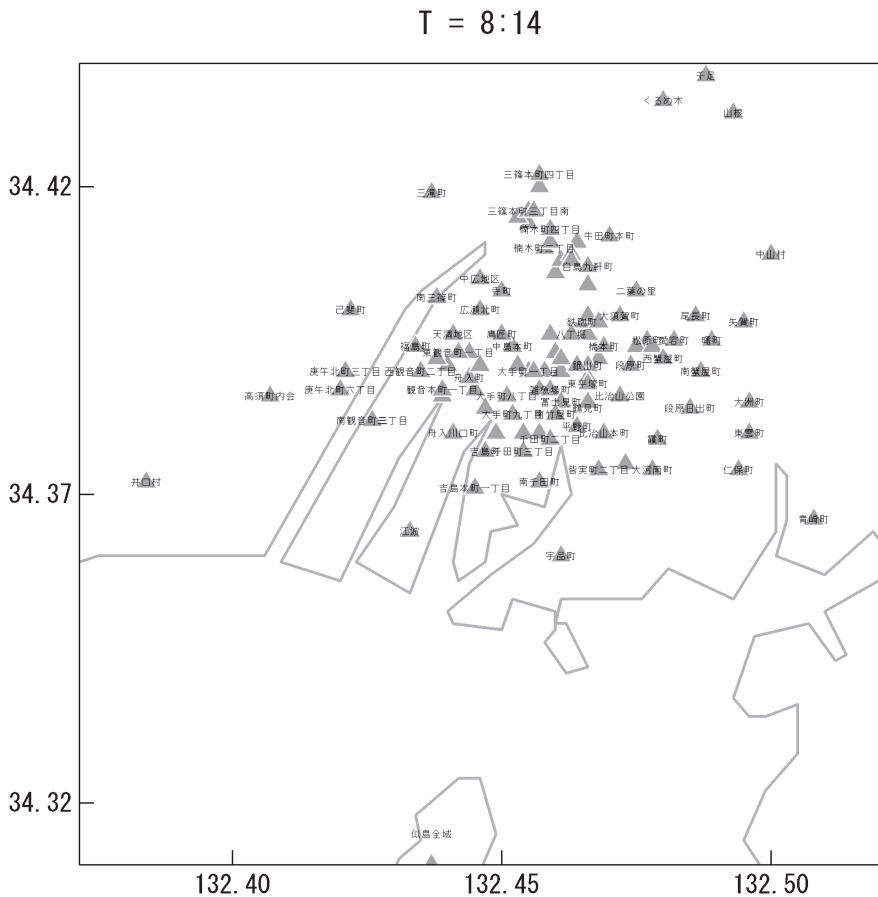


### 結果と若干の考察

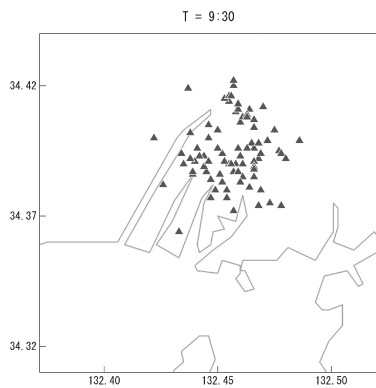
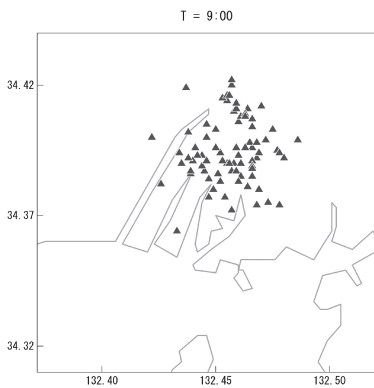
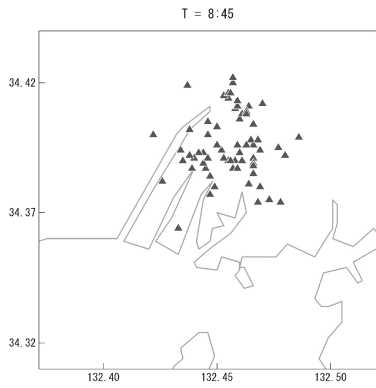
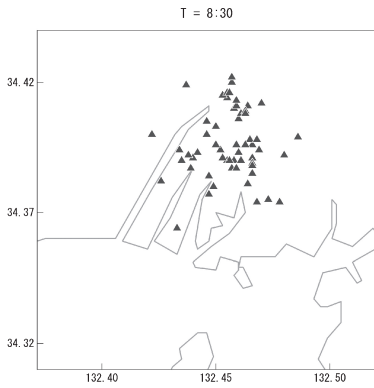
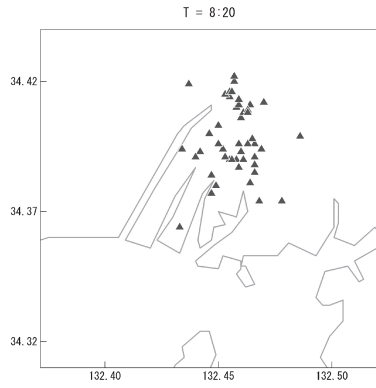
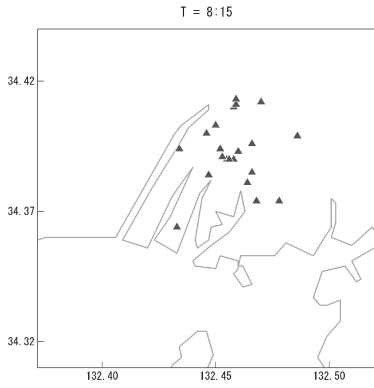
原爆投下後の火災であるが、熱線による一次的（直接）発火および爆風による建物の破壊にともなう二次的（間接）発火から生じた。広島では、爆発後 30 分頃から大火となって火事嵐がふきはじめ、その風速は 2~3 時間後には 18m/s に達し、午前 11 時~午後 3 時には、市の中心部から北半分で局所的に激しい旋風がおこった。午後 5 時頃になってようやく軽風に落ちた。この火事嵐のため、爆心地から半径約 2 km の円内では、燃えうるものはすべて燃え尽くした（広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編 1979 : 25）とある。

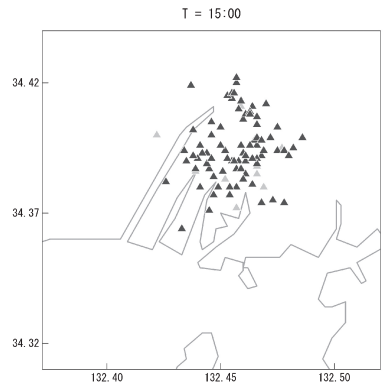
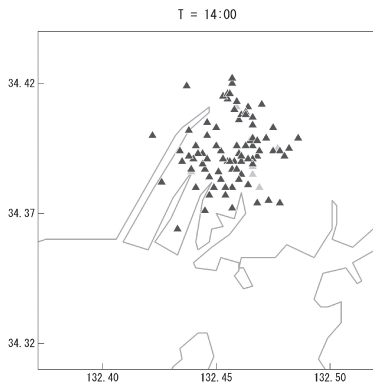
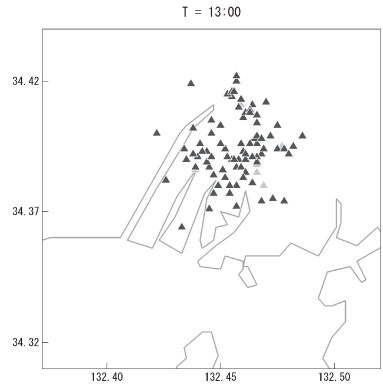
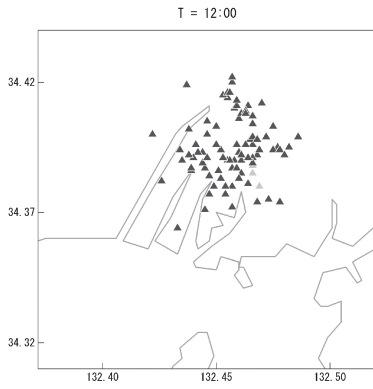
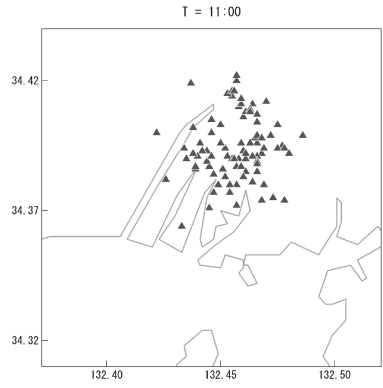
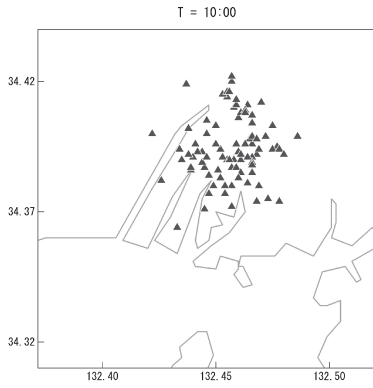
図 2 は、表 1 の各町名の発火時刻及び終息時刻を時系列的に視覚化したものである。最初の図は、町名を判読しやすいように拡大したものである。以下、延焼状況を時系列的に示した。濃い三角が延焼中であることを示し、薄い三角が鎮火済みであることを示している。また、図 3 は、表 1 の延焼状況中に記されている風向について、矢印で示したものである。詳細な時刻は不明なため、便宜的に、午前 10 時における延焼状況図に書き入れた。

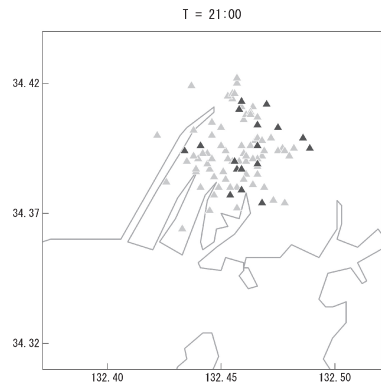
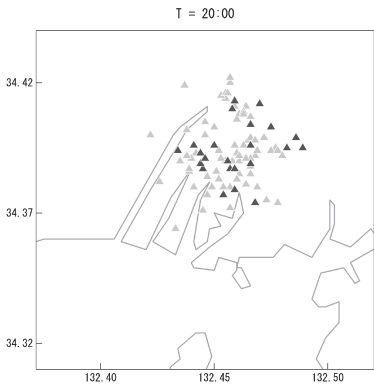
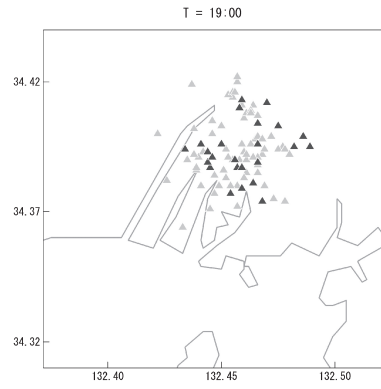
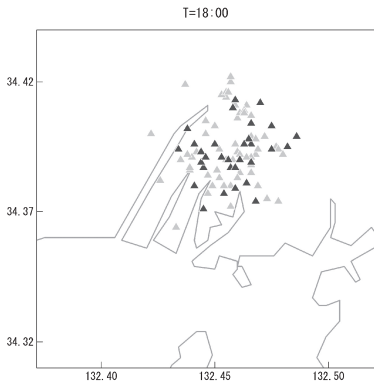
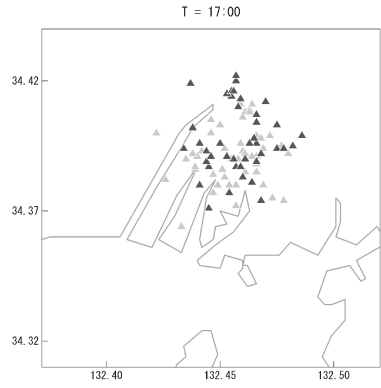
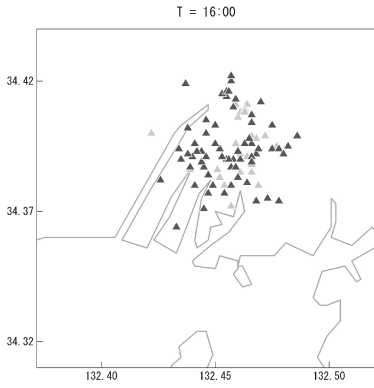
図 2 延焼状況の視覚化











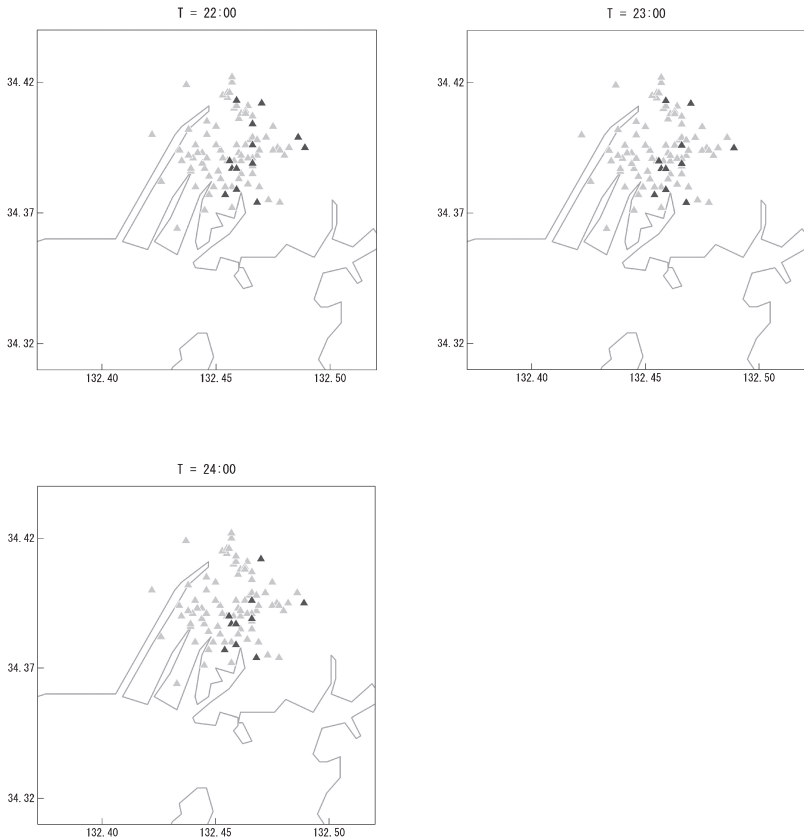
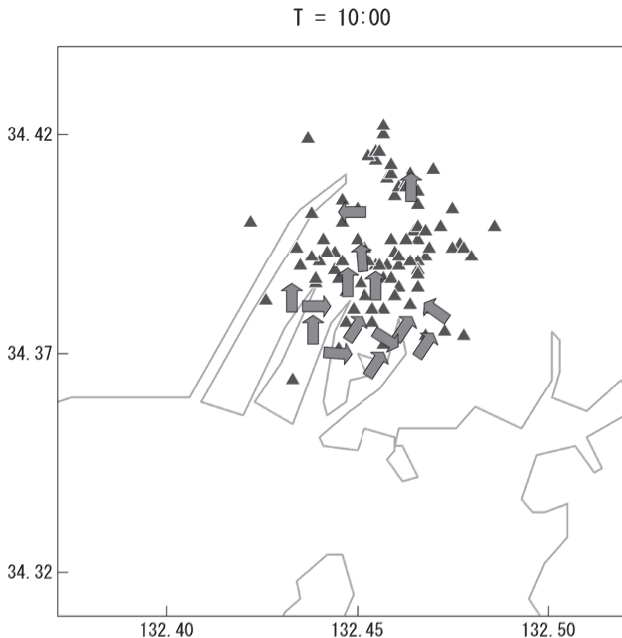


図 2 の結果として、第一に、原爆投下直後、21 町で直ちに発火していることが確認できる。爆心地から近距離の場合は、熱線による発火が考えられるが、江波などの地域では、爆風による二次的発火とも考えられる。何れにせよ、その後、火災は広がり、午後 3 時頃にはほぼ市内全域が延焼していることが認められる。この時刻を境に、徐々に鎮火する地域が増え、火災が終息に向かっていく様子も確認できる。図 3 では、風向きが爆心地の西方地点を中心とした反時計回りであることが確認できる。この風向きは、延焼状況にも少なからず影響を与えたものと考えられるが、図 2 にそれを示す明らかな特徴は認められない。また、千田二丁目・三丁目あるいは中島地区のように、8 月 6 日中に鎮火し

なかった町も確認できる。それらの大半は爆心地から東側に点在していた。

図3 延焼中の風向



結びに代えて

2010年7月、広島県知事・広島市長・廿日市市長・安芸高田市長・府中町長らは、連名で「原子爆弾被爆地域の拡大に関する要望書」を厚生労働省に提出した<sup>7</sup>。その主旨は、『「黒い雨」降雨地域は、いわゆる「宇田雨域」よりも広く、未指定地域での「黒い雨」体験者は、心身健康面が被爆者に匹敵するほど不良である。それ故に、2008年度（平成20年度）実施の調査で判明した「黒い雨」降雨地域全域を第一種健康診断特例区域に指定すること』であった。原爆被爆者の平均年齢は2010年3月時点で76歳を超えている。未指定地域住民にもかなりの高齢化が進んでいることは疑いようもない。本稿で提示した延焼状況の視覚化が、原爆研究の深化に寄与することを願うと共に、これら未指定地域住

民の福利厚生に少なからず寄与することを願うものである。

## 引用文献

- 広島県・広島市（1975）「原子爆弾被爆地域の指定に関する陳情書」
- 広島“黒い雨”放射能研究会編（2010）『広島原爆“黒い雨”にともなう放射性降下物に関する研究の現状』
- 広島市（2010）『原爆体験者等健康意識調査報告書』、広島市
- 広島市健康福祉局原爆被害対策部（2010）『平成22年版原爆被爆者対策事業概要』、広島市
- 広島市原子爆弾被爆実態調査研究会（2004）『広島市原子爆弾被爆実態調査研究報告書』、広島市
- 広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編（1979）『広島・長崎の原爆災害』、岩波書店
- 広島市役所（編）（1971）『広島原爆戦災誌 第二巻』、広島市役所
- 川野徳幸（2010）「原爆被爆被害の概要、そして原爆被爆者の思い」、日本平和学会編『平和研究』第35号、19-38、早稲田大学出版部
- 黒い雨に関する専門家会議（1991）『黒い雨に関する専門家会議報告書』
- 増田善信（1989）「広島原爆後の“黒い雨”はどこまで降ったか」、『天気』Vol.36, No.2、69-79
- 松尾雅嗣・谷整二（2007）「広島原爆投下時の一次避難場所としての川と橋」、『広島平和科学』29、1-27
- 日本公衆衛生協会（1976年）『広島、長崎の残留放射能調査報告書 昭和51年度』（厚生省調査研究委託費による）
- 日本公衆衛生協会（1978年）『広島、長崎の残留放射能調査報告書 昭和53年度』（厚生省調査研究委託費による）
- 宇田道隆、菅原芳生（1953）「気象関係の広島原子爆弾被害調査報告」、日本学術振興会編『原子爆弾災害調査報告集』（第一分冊）、98-135

## 注

- <sup>1</sup> 原爆被爆研究の概要については、例えば、川野（2010）を参照。
- <sup>2</sup> 詳しくは、昭和50年6月に広島県知事・広島市長より提出された「原子爆弾被爆地域の指定に関する陳情書」およびその付属資料を参照。
- <sup>3</sup> 詳しくは、(財)日本公衆衛生協会『広島、長崎の残留放射能調査報告書』の昭和51年度版と昭和53年度版を参照。
- <sup>4</sup> 詳しくは、黒い雨に関する専門家会議（1991年）を参照。
- <sup>5</sup> 活動内容の詳細については、<http://city.youth-service.com/>（2011年1月13日アクセス）を参照のこと。
- <sup>6</sup> 詳しくは『原爆戦災誌』「例言」を参照。
- <sup>7</sup> 広島市健康福祉局原爆対策部（2010：183）を参照。

表1 広島市内の火災状況・延焼状況

地区名	町名等	座標	量初ニ着火した		延焼状況	終息時間	調査する記述(抜粋)	備考	
			発煙	発火					
1 理の寺地 区 区	六手町一丁目～ 七丁目	緯度 34.3911 経度 132.458	一斉	不明	防火避難線に二名が死亡し、種々の建物に延焼的に に波及したと推量され、他の地域は隣所から着火 し、ほぼ北から南(市役所方面)へかけて延焼した ように思われる。	不明	全地区が火の煙で、各所に二名が死亡して、赤々と上 空を集めていた。	49	
	理の寺町		不明	不明	防火避難線による自然発火もあつたようである。 2夜中、ある所では 延焼状況は不明。	3日後(8月9日) 午前中まで	一晩中、ノソノソと物の燃焼する音が響え、 夜遅くなんとも鎮火し、その気配は薄かつた。	50	
	下中町(ほか)		不明	不明	西方面から着火し、延焼した。	3日後(8月9日) 午前中まで	炊事場の残り火が原因であつたよう。		
	理の寺町		不明	不明	防火避難線による火災が多いためであるが、 発火より延焼による火災が多いためである。 8時30分頃 御蔵と同時期 (8:15)	3日後(8月9日) 早朝まで	炊事場の残り火によるものがほとんどである。		
	理の寺町		不明	不明	西方面におかれて火勢強く、たちまち全町に延が る。 延焼不明。	2夜中、ある所では 9日朝まで	防火避難線によつて電柱が燃えて、 不道義者が懐火に刺さつて、 騒音がある。 3日後もすぶる	89	
2 中島地区	中島本町	緯度 34.394 経度 132.456	一斉	不明	不明	夕方6時頃でも なお火が盛んに 燃え上がる			
	天神町	緯度 34.391 経度 132.453	一斉	不明	不明	不明			
3 本川地区	本朝町、材木町、 中島新町、木生	緯度 34.387 経度 132.448	一斉	不明	不明	午後4時			
	吉島野本町一丁目	緯度 34.377 経度 132.440	数箇所より発生	午前8時20分頃	西風におおられて火勢強く、たちまち全町に延が る。 延焼不明。	午後4時			
	理の寺町、徳治屋 町、右衛門、福屋 町、堺町など	緯度 34.389 経度 132.449	斉	午前8時20分頃	約5分後には、全地域が火災のつぼと化してい た。火勢が北から北へわかつて燃え、各町区と同時 に火災を生じ、午前中にほとんど全地区を延焼 した。	午後3時頃 一帯はさらに燃え 続けた	全鎮が煙さつきつぎ上つたのは午後8時ごろ。 赤間になつても所々残り火があつて、煙をあげていた。 倉庫などは(中略)6日以降も23日燃え続けた。	128	
	4 基町地区	広島市中区菅区 百全部	緯度 34.389 経度 132.461	二部隊方面	不明	不明	不明		167
	5 養の里地 区	西白鳥町	緯度 34.406 経度 132.460	不明	不明	町内全域全焼。	不明		207
	白鳥西中町	緯度 34.408 経度 132.461	不明	不明	町内全域全焼。	不明		213	
	白鳥北町	緯度 34.411 経度 132.484	不明	不明	町内北端部の物件が午後3時ごろ南からの風が北 からに変わり強げ強つた。以外全焼。	不明	御津神社裏が火災を上げはじめ、火勢が盛んに燃え に使用のもの、悪い煙差が起り、川水は熱い桶しごと になつて狂い立ち、トコトコ煙が100m以上も吹きあげられ た。隣津にあがつた火災は、たちまち近くの火災と手を 繋いで、ついに三軒煙を連つた。		
	白鳥中町	緯度 34.409 経度 132.483	不明	不明	町内北端、川上町の家の敷地だけが中破で り、焼けた以外は、町内全焼。	不明	牛田ふたまた土手付近の製物倉庫が、焼になつても燃 え続けた。牛田の山腹でも二か所くらい燃えているのが見 られた。		
	白鳥東中町	緯度 34.403 経度 132.483	不明	不明	町内北端、川上町の家の敷地だけが中破で り、焼けた以外は、町内全焼。	不明			
	東白鳥町	緯度 34.407 経度 132.486	不明	午前8時40分頃	全戸全焼。	午後10時頃			
	白鳥本町	緯度 34.403 経度 132.486	不明	午前8時40分頃	全戸全焼。	不明			
	二葉の里	緯度 34.403 経度 132.471	第二總軍炊事場	午前9時過半頃	川上町の川側の家(2軒)が焼けた以外、町内全 焼。	午後9時頃まで。 午後5時までの 火、3日位燃える	二葉の里方面は前雨前が降り出し、同時に風が起き た。風速は約10m/sといふ程強い風で、火の土手が 燃焼を起して空へ煙が上がることが見られた。炊事場 も兵舎の火の手は、一掃火で消されて広がりが、(中略)火 災を起した。		

地区名	町名等	座標	最初に発火した 詳細な場所	時刻	延焼状況	終息時間	関連する記述(抜粋)	震災被害 概要
6 牛田地区	牛田町本町	緯度 34.411 経度 132.488	神田橋東詰の家	午前8時(8:15)	西部地区全焼。	午後12時頃	神田橋たもとから上流、下流に沿って建っている家々は、ワラ屋根の農家風の家が多かったが、女丁に屋根から火を噴きあげ、熱風が道路を吹きつけていた。やがて川ぞい一帯は火災につつまれて全焼した。	234
	神田区	緯度 34.409 経度 132.470		午前10時頃	西部地区全焼。3分の1位残る。	午後12時頃		235
	丹土区	緯度 34.416 経度 132.466		午前10時頃	西部方面全焼。	不明		
	新町区	緯度 34.421 経度 132.466		午前10時頃	西部の一部全焼。	不明		
	南町区	緯度 34.407 経度 132.472		午前9時頃	西部方面全焼。	不明		
	戸城地区	緯度 34.434 経度 132.480	火災なし				この地区では、原子爆弾の炸裂により火災が発生するということにはなかった。	254
8 磯町地区	山根町	緯度 34.392 経度 132.488	四方から火の手	午前9時頃	不明	不明	各町でも、各所から発火したことで、最初どこから発火したのかわからない。	275
	磯本町	緯度 34.394 経度 132.469	西方から	午前8時20分頃	不明	不明	といたことを記憶している者がいない。	277
	石見屋町	緯度 34.396 経度 132.466	西方から	午前8時17分頃	不明	2日余り後	午後2時頃、避難者でこたがえす奥邸(繪景園)の中の森が燃えはじめ、木から木へと燃え移る音が聞こえた。	
	銀川町	緯度 34.393 経度 132.466	西方から	午前8時20分頃	不明		それと同時に一番巻がおこり、地上の木切れ、板切れ、トタンなどが高く、100mくらい吹き上げられ、東部向こうの河原(大須賀町付近)の方へ落下した。	
	弥生町	緯度 34.389 経度 132.466	四方から火の手	午前8時25分頃	不明	2日位		
	鉄砲町	緯度 34.398 経度 132.485	不明	午前8時20分頃	各所から火の手が上がったというだけで、その時の状況を記憶している者はいない。			
	八丁堀	緯度 34.396 経度 132.463	不明	同上				
	堀川町	緯度 34.390 経度 132.481	不明	同上				
	胡町	緯度 34.392 経度 132.461	不明	午前10時頃	12時頃は全町火の海となる。	午後3時頃		
	斜屋町	緯度 34.391 経度 132.464	不明	同上				
	上流川町	緯度 34.399 経度 132.466	不明	同上				
	轡町	緯度 34.398 経度 132.468	不明	午前8時半頃	各所から発火。	午後3時頃か		
9 荒神地区	大須賀町	緯度 34.399 経度 132.472	(上本須賀町) 飛石的に発火(大須賀町) 灰敷印刷方面	午前11時半頃	飛火にて火勢全面におよび全町が焼失した。	午後2時30分頃	炸裂後間もなく松原町、大須賀町、荒神町内から火災が発生し、午後3時頃まで燃え続け、地区の約70%が消失した。	318
	松原町	緯度 34.395 経度 132.477	広島駅前方面	午前9時頃	2.3か所より発火、四方に延焼し、全町が全焼した。	午前12時頃		
	猿渡橋町	緯度 34.394 経度 132.475	電車通り中央部	午前10時頃	どこどころより発火しているのが見え、全町が全焼した。	午後1時頃		
	荒神町	緯度 34.394 経度 132.478	(東組) 中央部2か所よ 中(西組) 純道線終端と中央部(3か所上)	午前9時半頃	発火の不始末と発火と恐ろれるが、約5戸を残して他は全部焼けた。	午前12時頃		
	西蔵屋町	緯度 34.392 経度 132.480	一部に火災発生	午前8時半頃	不明	不明		



地区名	町名等	座標		最初に着火した		延焼状況	終息時間	関連する記述(抜粋)	備考 掲載ページ			
		緯度	経度	詳細な場所	時刻							
10 大洲地区	大洲町真組	緯度 34.385	経度 132.496	火災なし					334			
	大洲町西組	緯度 34.399	経度 132.486	火災なし								
	大洲町南組	緯度 34.390	経度 132.487	火災なし								
11 尾長地区	尾長町真山楨	緯度 34.399	経度 132.486	午後3時頃	西側尾長国民学校校舎より順次延焼。	尾長町の湯沢織工場の原	午後6時40分	正午ごろ、誰かな時間不明、愛宕町の湯沢織工場の原 四方に延焼し、尾長町の私本工業学校・尾長国民学校 へと燃え移り、ついに真山楨に火の手が迫って来た。向 内にとどまっていた、8人の音や隣町の音、ハウヅ藤法 で炎死の注水を行って防火につとめた。	357			
	尾長町西山楨	緯度 34.402	経度 132.482	被褥直後	尾長町西山楨で発生							
	尾長町丸山	緯度 34.399	経度 132.489	午後2時頃	私本工業学校							
	尾長町石河	緯度 34.395	経度 132.487	火災なし								
	尾長町長尾	緯度 34.395	経度 132.487	火災なし								
	尾長町生草	緯度 34.395	経度 132.487	火災なし								
	愛宕町	緯度 34.395	経度 132.482	午後12時頃	釜雲神社	焼失						
	曙町	緯度 34.395	経度 132.489	午後7時頃	釜雲神社	焼失						
	12 矢賀地区	矢賀町	緯度 34.398	経度 132.485	火災なし							365
	13 中山地区	中山村	緯度 34.409	経度 132.500	火災なし							379
14 段原地区		段原町	緯度 34.391	経度 132.500	火災なし			401				
15 比治山地 区	比治山公園(庫裏 一帯)	緯度 34.382	経度 132.474	火災なし				437				
	東雲町	緯度 34.380	経度 132.473	火災なし								
	段原日出町	緯度 34.384	経度 132.486	火災なし								
	16 皆美地区	皆美町二丁目	緯度 34.378	経度 132.485	午前11時半頃	煙草の葉を包装したワラに火がついて燃えひろ かった。これが比治山本町へかけて燃えつづけた。	2～3日間燃焼		455			
	皆美町	緯度 34.374	経度 132.488	午前8時15分	消火にあたる。			456				
	比治山本町	緯度 34.380	経度 132.469	不明	電車線沿の西側のみが、専売局方面から北上して 延焼した。	不明						
17 仁保地区	仁保町	緯度 34.374	経度 132.489	火災なし				473				
18 大河地区	旭町	緯度 34.375	経度 132.484	午前8時半頃	専売局の倉庫が全焼し、隣町の絹本工場倉庫に延 焼が及ぶ。消防団の活動によってたまたかに消 えられた。	三戸焼失、三戸半やの程度で、大火になることを食い 止めることができた。	484					
	大河南町	緯度 34.374	経度 132.473	隅光と同時(8: 15)	専売局が着火したが、隣町の活動により半焼程度 で消えた。							
	霞町	緯度 34.379	経度 132.476		熱線によって専売局が燃えはじめたが、釜山と 同時に、隣組が協力して消火にあたり、延焼を防い だ。							
	19 青崎地区	青崎町	緯度 34.366	経度 132.508	火災なし				502			
20 宇品地区	宇品町	緯度 34.360	経度 132.461	火災なし				517				
	21 似島地区	似島	緯度 34.310	経度 132.437	火災なし				541			

地区名	町名等	座標	詳細な場所	最初に発火した時刻		延焼状況	終熄時間	関連する記述(抜粋)	被害状況
				時刻	時刻				
22 竹屋地区	東平塚町	緯度 34.388 経度 132.466	東平塚町の南風が吹き、燃え広がる。 地区全焼。				午前11時頃	屋根の角っこや物干し等をかけるツアマチの法蓮に、ボツと火がついた。これは熱線による自然発火であったことが、後日はっきり判ったが、当座は突如不思議であった。その火が四方に燃え広がるのが、また早い速度であった。	566
	鶴見町	緯度 34.385 経度 132.466	竹屋国民学校	閃光と同時に(8:15)	閃光と同時に竹屋国民学校の講堂が火災に包まれている。その火災が強い勢いで燃え立つと小さく綿巻ながら崩壊し、空中を三川向の方まで移動した。崩壊し再び火災に大きくなっていった。	午前11時頃			
	南千田町	緯度 34.372 経度 132.457	藤本工所および中国電力株式会社変電所より	午前9時頃	藤本工所および中国電力の変電所より発火し、油桶の油が燃え上がり、南西の風で火勢が強くなってきたが、車隊の応援もあり必死の消火によって鎮火する。	午後2時頃			
23 千田地区	東千田町	緯度 34.380 経度 132.457	電鉄車庫付近	午前10時頃	千田の駅は変圧器からと想う。南西の風、火勢強く千田国民学校・平野町・南竹屋町と次々に延焼する。	午後4時頃		7日となった午前の晴さでも、千田町二丁目方面は、いまだに激んに燃えていた。その火災の明かりが明るく、併せあつたには黒田釜・ポン・鹿石などが燃えるだけで、そのほかは何も無いという目を疑う態様が出現していた。	590 805 807
	千田町一丁目	緯度 34.380 経度 132.454	赤十字病院西側付近	午前9時半頃	千田の駅、赤十字病院の発火につづり、おりから南西の風で次第に八丁目、九丁目の火災とで火勢が加わり会合におこした。	午後3時頃			
	千田町二丁目	緯度 34.379 経度 132.459	山中高等女学校北側	午後6時頃より	無関係であったが、山中高等女学校に延焼すると同時に、北西方向より山が揺れこり、南東と北東に向い、北西の風で火勢は広がったが、幸いには燃焼程度は、いさよ遠くは、次々と延焼して行く。	午前5時頃 午後4時頃			
平野町	千田町三丁目	緯度 34.377 経度 132.454	山中高等女学校上したため、付近の民家につ	7日 午前9時頃より	北西の風で火勢は広がったが、幸いには燃焼程度は、いさよ遠くは、次々と延焼して行く。	8日 午後7時頃			
	平野町	緯度 34.381 経度 132.464	大学専心斎、八幡氏宅台所付近より発生。また東千田町、南竹屋町から延焼する	炸裂直後(8:15) より煙を出していた。	別荘通りは、向う岸の南雲町の炎上している煙が正午頃円筒形で水上を走るようにして漂ってきて火した。南西の風により川下から建築してくると合し、市の中心部に向け火勢は運んだ。				
	富士見町	緯度 34.385 経度 132.461	東千田町の広島文理大裏にある民家が広島電鉄車庫炎上のため延焼したのがそのまま火災となる。	午前9時頃	南西の風、火勢も強く飛火で炎上した箇所が多い。	午後3時頃			
24 吉島地区	南竹屋町	緯度 34.381 経度 132.460	同上	同上	同上	同上	午後3時頃		835
	大手町八丁目	緯度 34.385 経度 132.451	赤十字病院裏手及び公設市場たむらひ明治橋付近	午前10時50分頃	南西の風、北東に向い延焼し、火勢激しく炎が風で飛び回り、これにより更に火勢を助けた。発火の原因は、いさよれ電柱の変圧器より発生したことを認め	午後3時頃			
	大手町九丁目	緯度 34.382 経度 132.452	南大橋車庫の橋市場および明治橋裏詰付近	同上	同上	午後2時頃			
25 神島地区	吉島本町一丁目	緯度 34.371 経度 132.445	同上	午前10時頃	吉島本町一丁目では、午前10時ごろ中心部南側から火が出て、北へ向け広がりを、ついで一丁目は燃え、その他の地域においては、熱線による火災も、その他の原因による火災も発生した。	午後8時頃 午後9時頃		853	
	西新町 小瀬町 河原町	緯度 34.397 経度 132.445	同上	午前10時40分頃	地区内の各町から発火し、猛烈な勢いで炎上した。風は南から吹くが、火は北を向き、白いような黒いような煙がもうつとあがった。	7日午前10時頃 午後5時頃	黒い煙が降り始めて、一時火勢が衰えたように思われたが、晴天になって、再び炎上した。		

地区名	町名等	座標	最初に発火した場所		発火時刻	延焼状況	終熄時間	関連する記述(抜粋)	調査日時
			詳細な場所	延焼経路					
20 舟入地区	舟入幸町	緯度 34.939 経度 132.440	住宅 焼損 住主 焼損	午前9時頃	町内全焼		午後12時	発火後、船屋が倒壊して舟船場になつた者が、やつと達 い出して舟ごと、舟注の家は全焼焼死してしまい、舟注と つかめないうほど町内の様子が一変していた、山打 つて火災になつたが、どうして出たのかわからない、とい う状況であった。	689
	舟入川口町	緯度 34.950 経度 132.441	舟入町にあたる舟 九条町に近いと ころ	早い地域は午前9 時頃、遅い地域 は午後3時頃					
		緯度 34.965 経度 132.437	住若7戸おひび 倉庫1戸	炸裂後0.15秒分 後	火災なし		午前10時頃		
27 江波地区	江波東町	緯度 34.373 経度 132.438	倉庫1戸	火災なし					716
	江波本町	緯度 34.368 経度 132.435	元観音者權講所 倉庫2戸	炸裂後0.15秒分 後	倉庫の一戸には可燃物を入れてあったのへ引火し た。	午前9時半頃			
	江波南町	緯度 34.364 経度 132.433	火災なし						
28 広瀬地区	寺町	緯度 34.403 経度 132.450	広高別院		広瀬地区全域にわたつて燃焼し、各所から発火し た。				
	広瀬北町、広瀬 元町、錦町、西九 軒町、西引御堂 町、新市町、権延	緯度 34.400 経度 132.446							
	天満・中 広地区	緯度 34.396 経度 132.441 緯度 34.404 経度 132.444		午前9時頃	地区の各町とも、飛石的に火災が発生した。 中広(西)西等りの家屋は火災が発生しなかつた が、他は同じ状況で、最初の火災発生は、前夜、敵 が、油をまいたことからも、町内(ことには、か所か 所)で発生したと見られる。町内、町内、町内、町内、町内、 町内、町内、町内、町内、町内、町内、町内、町内、町内、 山手町の山林が自然着火して火災を起していた。	午後9時頃		738	
30 観音地区	南観音町一丁目	緯度 34.386 経度 132.435	不明	午前6時半頃	町内50%は全焼した。				758
	南観音町二丁目		不明	同上					
	東観音町一丁目	緯度 34.393 経度 132.442	天満川上堤付 近	午前6時20分	町内一円に延焼して全焼。		午後4時頃		
	東観音町二丁目	緯度 34.391 経度 132.440	天満川川上堤付 近及び町内各所 より		四方に延焼して全焼。				
	観音本町一丁目	緯度 34.387 経度 132.439	東観音町方面か らと町内中央部	午前10時半頃	南西に向つて延焼し全焼。		午後4時頃		
	西観音町一丁目	緯度 34.392 経度 132.438	東観音町二丁目 方面と町内中央 部		南西に向つて延焼し全焼。 (但し、六戸残る)				
	西観音町二丁目	緯度 34.390 経度 132.435	東観音町二丁目 と西観音町一丁目 日寄りからと町 内各所		西南に向つて延焼し全焼。 (但し、一部残る)				

地区名	町名等	座標	最初に発火した場所	発火時刻	延焼状況	終息時間	関連する記述(抜粋)	
31 福島県 三條地区	南三條町	緯度 34.409 経度 132.438	延焼した場所 福島町1丁目 延焼が1時間以内には本町内には飛石的には発生していた	午前0時35分	当初は田原町で延焼が散在していたので、飛石的に火災が発生したところからは延焼も発生していたが、福島本町に近いところでは延焼も発生していた。当時の全戸数の約44%が全焼した。	時刻頃まで	福島本町および福島町は遅くから延焼が起りましたが、夜間にかけて延焼が続いていた。この両町以外の他の町は、被災直後には、すでに火災が発生していた	
	福島北町	緯度 34.396 経度 132.434	南に隣接している福島本町から延焼してきた	午前0時35分	当初は延焼も発生していたが、約44%が全焼した。	午後4時頃		
	福島本町	緯度 34.394 経度 132.434	延焼した場所 延焼が1時間以内には本町内には飛石的には発生していた	被災(8:15)直後	火勢の方向ははじめ西より東に向い、後に南より北へ進み、更に北より南へ向って延焼していったようである。火力強く、全戸数の95%が全焼した。	午後12時頃		
	福島中町		福島本町から延焼	午前10時過ぎ	約95%にわたり家屋が全焼した。	夜間		
	福島南町	緯度 34.390 経度 132.434	福島中町から延焼	午後12時過ぎより	全戸数の約30%が全焼した。	夜間		
	福島沖町		中野化工工場	被災(8:15)直後	全戸数の約30%が全焼した。	午後3時頃		
	三條町	緯度 34.416 経度 132.443	南部 薬屋 西部 上山手裏 中部 原薬屋 北部 原薬屋	午前8時20分	薬切、薬屋一面に着火炎上する。風強く飛火する。鳥がはかれているので、火の勢がかなり激しく炎上する。火勢の強くなるにつれて、旋風様となる。	午後5時	被災直後、15分ぐらいして、ウラ葺の家が自然発火し、各所から白煙が立ち上がった。その煙と輝が見る見るうちに連らなって、一大火災となった。消火する人手もなく、また消防もなかつたから、下草などに燃え広がったまま生きながらに焼け死んだ人々は数えきれない。	
	三條本町二丁目東	緯度 34.414 経度 132.455	延焼した場所 延焼が1時間以内には本町内には飛石的には発生していた					
	三條本町二丁目西	緯度 34.415 経度 132.453	町内数か所					
	三條本町三丁目南	緯度 34.416 経度 132.455	町内数か所					
三條本町三丁目北	緯度 34.420 経度 132.457	町内数か所						
三條本町四丁目	緯度 34.422 経度 132.457	南部、飯田製材 所立材付近、薬屋 延焼数が所炎上						
大芝町	緯度 34.416 経度 132.456	お近所のウラ葺の家から一番に延焼						
楠木町二丁目	緯度 34.410 経度 132.458	東芝工場の延焼	被災(8:15)と同時間					
楠木町三丁目	緯度 34.411 経度 132.459	延焼した場所 延焼が1時間以内には本町内には飛石的には発生していた	自然発火					
楠木町四丁目	緯度 34.413 経度 132.459	大宮国民学校付近 近の原毛が一番に延焼						

地区名	町名等	座標 緯度 経度	最初に発火した 詳細な場所		延焼状況	終息時間	関連する記述(抜粋)	消防署 所属
			戸数(延焼)	詳細な場所				
33 己斐地区	己斐町	緯度 34.400 経度 132.422	戸数(延焼) 132.422	各所に与々として火災が発生。重本町(重中筋)に 隣る。中本町、中町、上町(山間部が多いなど)にも 午前6時半頃から 全焼家屋がある。		およそ 午後2時頃		836
34 豊津・庚 牛地区	庚牛北町三丁目 庚牛北町六丁目	緯度 34.390 経度 132.421 緯度 34.387 経度 132.420	緯度 34.390 経度 132.421 緯度 34.387 経度 132.420	全焼家屋がある。 一戸全焼。			野積みにしてあったワラとか、下列した木の束、屋内に 吊ってあった蚊帳などに着火したが、すぐ消しとめたた め、大車に至らなかった	862 863
35 古田地区	高須町内会 古江町内会 田方組町内会 (宇山田を含む)	緯度 34.386 経度 132.407	緯度 34.386 経度 132.407	火災なし				876
36 井口地区	井口村	緯度 34.372 経度 132.394	緯度 34.372 経度 132.394	火災なし				897

緯度・経度については、緯度・経度算出(For GoogleMap) <http://42.195km.net/run-wiki/googlex.htm> を参照。2011年2月7日アクセス。  
町名のよみがなについては、広島市ホームページ(<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/0000000000000/1110871016786/index.html>)を参照。2011年2月7日アクセス。

この地区で火災の発生がなかったのは、南千田町、および千田町三丁目南組町内会区域だけである。千田町三丁目西組、北組の両町内会が七〇%、平野町は九九%が全焼し、他の町は全域にわたって全焼している。

各町別の火災発生炎上の詳細は、次のとおりである。

町名	最初に発火炎上しはじめた		延焼の状況	火災終息の時刻
	場	所		
南千田町	藤本木工所および中国電力株式会社変電所より	午前九時頃	藤本木工所および中国電力の変圧器より発火し、油槽の油が燃え上がり、南西の風で火勢が強くなったが、燃え上り、軍隊の応援もあり必死の消火によって鎮火する。	当日午後二時頃
東千田町	電鉄車庫付近より	午前一一〇時頃	発火の原因は変圧器からと思う。南西の風、火勢強く千田国学校・平野町・南竹屋町と次々に延焼していった。	当日午後四時頃
千田町一丁目	赤十字病院西側付近	午前九時半頃	南大橋、魚市場の飛火で民家につり、おりから南西の風で大手町八丁目、九丁目の火災とで火勢が加わり全町におよぶ。	当日午後三時頃
千田町二丁目	山中高等女学校北側	午後六時頃より	無風状態であったが、山中高女校舎に延焼すると同時に、北西方向より風が起り、南東と北東に向い、電車道へ延び、次々と延焼して行く。	七日午前五時頃
千田町三丁目	山中高女校が炎上したため、付近の民家につり延焼した。	八月七日午前九時頃より	北西の風で火勢は強かったが、幸いに微風程度だったため、道路境で南側に延焼するのを食い止めた。	八日午前四時頃